

2016年12月19日

札チャレラジオ通信 第49回

加納：三角山放送局をお聴きの皆さん、こんにちは。月曜日午後3時、三角山放送局から札チャレラジオ通信をお届けします。私はNPO法人札幌チャレンジドの加納尚明です。よろしくお願いします。この番組は自立を目指す障がいのある人が「ITでマザル、ハタラク、拓き合う。」社会を創りたい、そんな思いで活動しているNPOの番組です。2016年の1月から始まりまして1年間限りということで、もう今月はラストの月になっておりまして、昨日は真田丸もついに終わってしまいましたが、札チャレラジオ通信もあと2回ということで。今日はですね、就労移行支援グループの大山さん、栄田さん、赤坂さんと一緒にお届けをします。よろしくお願いします。

大山・栄田・赤坂：よろしくお願いします。

加納：真田丸、見てました？見てない？

大山・栄田・赤坂：見てない。

加納：見ないんだ、あんないい番組。そうなんだ、誰も見てないんだ。

大山・栄田・赤坂：すいません。

加納：毎週毎週、あれを見るのが楽しみで。見忘れたときは、ネットでNHKオンデマンドでお金払ってまで見てた。まあ、それはいいとして、はい。いよいよラジオもですね、もう皆さん3人が出るのが今日が最後ということで、1年間、多い人は10回ぐらい出たかもしれませんが。少ない人でも4、5回は出てると思います。実際に1年間ラジオやってみての感想をまずは聞かせてほしいんですが、赤坂さん、どうでしたか？

赤坂：はい、緊張したまま終わったという感じで。本当に緊張しっぱなしでゲストの方のほう落ち着いたしゃべっているような、そんな感じでした。でもすごい楽しかったです。

加納：楽しかったですか、そうですか。はい、栄田さんどうですか？

栄田：そうですね、私も緊張でおなかがですね、毎回のよう痛くなるという。たまに痛く

ないときもあったんですけど、今日はなんとか痛くなく、終わり良ければすべてよしで、はい。

加納：今日は最後だと思っているから気が楽なんでしょう？

栄田：いや、今日は本当にいろんなことをこのラジオを通して皆さまにお伝えできて本当によかったなあっていう気持ちはありますね。

加納：はい、ありがとうございます。大山さんはどうですか。

大山：そうですね。最初は本当に緊張して、どうなるんだろう 30分と思っていたんですけども、少しずつ慣れてきまして。前半後半、これぐらいかなあみたいな感じが少しつかめてきたかなあと思ったところに終わるので、ちょっと。

加納：残念ですか。4月からも続けますか。

大山：いえいえ。でも本当にいろんな方のお話が、いろんな立場から聞いたので、それも良かったなと思います。

加納：われわれは人前で話す機会は、仕事からみんないろんな場面で大小問わずあると思うんだけど、こういうマイクの前でね、聴衆がいない中で、聴衆はラジオの向こうでたくさんいるんだけど。目に見えないから、なかなかそういう中でしゃべるっていうのは難しさもありますよね。

栄田：そうですね。

加納：就労移行支援グループに関わる人で、さまざまなゲストに来ていただいたと思うんですけど。少しですね、そのゲストの話を通して印象に残っているような話があったら教えてほしいんですけども。誰からでもいいけど、どうしましょう、赤坂さん。

赤坂：はい、赤坂で。そうですね、私は印象に残っているのは、やっぱり移行支援を利用されているメンバーさんと、あと卒業生の方が出た回がすごく印象的です。というのは、MCを私が担当したときが、ゲストの方がそのメンバーさんとかだったりで、いろんな思いがありながらいろいろ印象に残ってるなあというのがあって。メンバーさん皆さんがすごく伸び伸びと話をしてくださったというかですね、自分が今こんなことしてるとか、こんなこと頑張るとかかっていうのを、すごくたくさん言うてくださってですね、ありがたか

ったなあっていうのと。

あと、そういうメンバーさんとかスタッフのこのラジオのやり取りで、普段の私たちスタッフとメンバーさんのやり取り、空気感とかもすごくラジオを聴いている方に伝わったのかなあなんて思ったりして。同じ目線で一緒に頑張っていこうみたいな感じが、すごい伝わったんじゃないかなあというのは思いましたね。

加納：なるほどね。札幌チャレンジの就職支援はこんな雰囲気ですって言うのが伝わって。

赤坂：はい、そうですね。

加納：なるほど、そうですか。栄田さんはどうでしょうね。

栄田：はい、そうですね。私は何回かラジオにゲスト出演してくださった土井敦子先生。毎週金曜日に移行支援のコミュニケーション講習を担当して下さってる土井先生が一番印象に残ってますかね。

加納：土井先生のどんなところが印象に残っているんでしょうか。

栄田：よくコミュニケーション講習で、どういうことを行っているかというのをメンバーさんは受けているので分かるんですけど、ラジオを通してその札幌チャレでやっているコミュニケーション講習のことをみなさんにお伝えできているっていうところもすごく良かったのかなあとも思いますし。コミュニケーションっていうのは、こういうラジオといいますか、今回土井先生がお話して下さったりですとか、どこかに向かないとなかなか分からないこととかも、きっとあると思うんですよね。交流分析ってどういうことだろうとか。あとラジオを通してお話しして下さったのは、エゴグラムについてですね。やっぱり講習に出ている方は分かりますけど、実際こういうことをやっていますっていうのを、皆さんにも知っていただけてよかったかなあとは思っています。

加納：なるほど。あとおしゃべり、上手っていうか、もともとしゃべるってことをされているわけだから、聴く側としてラジオで聴いてましたけど。上手いなあっていうか、途切れがないっていうか滑らかに出てくるのがすごいなって。

栄田：MC としてもとっても助かっておりました、はい。

加納：そこが一番印象に残ってるかなあ。

栄田：そうですね。本当にそうです。一番はそこです、はい。

加納：私がしゃべりやすかったみたいな。

栄田：はい。本当に一番そこが助かってました、はい。

加納：なるほどね。では大山さんはどうでしょう。

大山：そうですね。企業さんの代表として出ていただいた東急百貨店の山川さんのお話がとても印象的です。

加納：東急百貨店さんには本当にお世話になって、今何人？

栄田：3名ですね、はい。

加納：同じところに札チャレの卒業生が3人もいるなんて、それはとてもありがたいね。改めて考えてみて、どういうところがその3人に就職に結びついたと思いますか。山川さんの話を踏まえて考えると。

大山：東急さんはすごくご本人たちの得意なことを生かした部署に配属してくださってるんですよ。しっかり見てくださっていて、面談もきちんと対応してくださっていて。すごくそのあたりは本当に企業さんとして。はじめこの部門でっていう形で入らせていただいて、見ていく中で合う職場があったりとか、合う部門があったらそちらにまた出してもらったりとか。

加納：そうそう。配置転換をして最適な職場をその人に対してマッチングしている。あの柔軟性というか、そこがありがたいよね。どちらかという組織って部署、部署に定員があって、一人の人が来たら、その人が何とか頑張ってしなきゃいけないんだ、みたいなのが一般的に多いんだけど。全然そうじゃないよね。

大山：本当に力を発揮して。3人ともすごく力を発揮していると思いますね。

加納：まあ、そういう話をラジオで直接ラジオを聴いている方に伝えられたのはよかったですね。またセミナーとかでも話してもらいたいとこですけども。なるほど分かりました。

そういう意味では札幌チャレンジのメンバーさん、講習に関わってくれている人、企業の人、そういう三つぐらいのカテゴリーですか。あと何か。

大山：支援者の側から。

加納：そうか、支援事業所の方に来ていただいたのね。

大山：はい、来ていただきました。

加納：OBとかOGとか札チャレの卒業生と一緒に、こういう所にマイクの前で座るっていう光景も、なかなか面白いよね。

赤坂：面白かったですね。そのときはすごい緊張していましたけど。

栄田：そうですね、出てくださった方は。

赤坂：ガッチガチに緊張してましたけど。でもなんかいいですよ、そうやって札チャレを卒業してからも、普通の定着支援とかで行くのとはまた別な場所で会って一緒にやるって面白いなあと思いますね。

加納：それも元々札チャレに最初来たときは、だいたいほとんどの人はしゃべりたくないっていうか、しゃべるのが苦手みたいな、極力うつむいている感じの人が多いでしょ。そういう人が1年とか2年、札チャレを経て企業に出てマイクの前に生放送で座ってしゃべれるなんて、すごい変化だよ。

大山・栄田・赤坂：そうですね。

加納：その変化は何で生まれるんでしょうね？どうしてそういう変化が。人間がそうやって成長するんだろう？

栄田：そうですね、やっぱりメンバーさん同士、お互いに雑談をしていく中で信頼関係を築いていったりですとか。あとは私たちスタッフといろいろとお話したりですとか、コミュニケーションの土井先生の講習を受けて、徐々に皆さん自分の心の扉を開いてくださるといいますか。それで安心できる場所、ここは何でもお話ししていいんだなあっていう、その安心感から皆さんどんどん笑顔になったりですとか、いろんなお話ししてくれてるのかなあというのを感じますね。

加納：職場で雑談ばかりしてたら怒られるけど、コミュニケーショントレーニングっていう意味でいうと雑談は非常にいいトレーニングなのかもしれないね。

栄田：そうですね。

大山：一番のコミュニケーションといいますよね、雑談は。やっぱり話していく中で否定されることがないっていうのは、自分を認めてもらえて、自分の意見も生かしてくれているとか。そういう認めてくれる場所っていうのがあって、どんどん自信をつけていっているっていうのはあると思うんですよね。そういう形で職場に行って、自分の力を出せるっていうのがね。ここが、移行支援がそういう場であってほしいと私たちも思っているので、少しずつそれが実現できているかなあと思うんですよね。

加納：そうですね。そういう意味では障害があるが故にできなかったことがトラウマになってたりとかして、自分を下に見たりとか自分自身で卑下するっていうような形で入ってくる人が多いから、やっぱりそこを、そうじゃないんだよって、素晴らしいところがいっぱいあるんだよってね。何だっけ？ほめ言葉カードだっけ？ああいうのもやったりして。やっぱり自己認識をプラス思考に変えていくと、変わっていくんですね。

大山・栄田・赤坂：そうですね。

加納：はい、ありがとうございます。もうあつという間に 15 時 13 分となっておりますので、ここで 1 曲ですね、リクエスト曲を聴いてもらいたと思います。このリクエストは赤坂さんのリクエスト曲なので、赤坂さんから紹介してください。

赤坂：はい。今日は岡崎律子の『For フルーツバスケット』という曲を聴いていただきたいと思います。何か言うんですけど？今の話の流れですごくよかったなあと思っていて。すごくこの曲はやさしい曲で、すごく歌詞が素敵なんですよね。なので話の流れとして、とてもいい曲を選んできたなあ、自画自賛で。

加納：歌詞に注目しながら聴いていただいて。よろしくお願いします。

加納：はい、三角山放送局から札チャレラジオ通信をお届けしております。今週は障害のある方の就職支援をしている就労移行支援グループの大山さん、栄田さん、赤坂さんと一緒にお届けをしております。前半ではですね、一年間このラジオをやらせていただいて、その感想とかですね、心に残っているゲストのお話を聞かせてもらいましたが、後半はですね、も

う来年が近づいておりまして、障害のある方の就職支援に向けて来年どんなことを考えているのかをですね、少しラジオをお聴きの皆さんに聴いていただければと思いますが、ここはやっぱりグループのことなので、グループリーダーに最初に口火を切ってもらいましょうか。

大山：そうですね。取り組もうとしていることの一つとしてですね、視覚障害のある方、私たちの移行支援グループにも今 2 名いらしているんですけど、今後もですね、少しずつ受け入れをしていきたいなと思っているんですけど。視覚障害のある方の就職についてのフォーラムを秋頃に他の団体さんと協力を得ながらですね、開催したいなと思っています。

加納：視覚障害の方が就職っていてもいろんな分野があるんですけど、何かこういう分野の就職ってというようなものはありますか。

大山：そうですね、はい。通常の一般企業に事務職として就職するためのノウハウですとか、今実際に就職している企業さんの当事者の方のお話ですとか、企業さん側のお話ですとか。そういうこともちょっと入れれるといいなと思っていますし、あとはどういうサポートが必要かっていうお話ですとか、その辺りもですね、お伝えできればいいなと思っています。

加納：3 人とも今年は東京の方に研修に行ってきた、実際に正直、東京はやっぱり進んでいるなあみたいな感想を持ったかと思うんですけど。その辺りはどうでした？栄田さん。

栄田：そうですね。やっぱり視覚の方向けの、そういう支援センターっていいですか、そこがあるってところでやっぱり進んでいるなというのもそうなんですけど、企業さんも本当に積極的に視覚に障害のある方を採用しているなっていうところも感じますし、そもそも視覚に障害のある方、当事者の方がすごい積極的なんですよ。

加納：なるほど。

栄田：自分がどこまでできるっていうのを企業さんにすごいアピールを自分からしているので、そういうところでもやっぱり進んでいるなっていういいですか、違うなあっていうのは思いましたね。

加納：まあ、ニワトリ卵とか、どっちが先か分からないけど、就職できる希望があると思えば人間頑張るし、なかなかいくら頑張っても採用してくれるあてが無いとどうしてもモチベーションが続かなかつたりとかっていうこともあるかもしれないからね。そういう意味ではやっぱり、まだまだ札幌ではそういうことに理解のある企業が少ないんですかね。

大山：実際に働いている方もいらっしゃるんですけども、やはりどういふサポートをしていいか分からないですとか。あとハローワークさんとかにも行っていただいてもなかなか。あん摩マッサージ師・鍼灸師ですとかね、そういうところがいいんじゃないのというお勧めがあったりとか。一般企業の中でというのは、なかなかちょっとないっていうところがありますね。

加納：でも東京でできることだから札幌だって絶対できるはずなんだからね。

大山・栄田・赤坂：そうですね。

加納：私たちでまずはそういう人を育てつつも、やっぱり職域開発っていうかね。それを並行してやっていかないと駄目なんでしょうね。分かりました、はい。視覚障害の方の就職をさらに広げていくにあたってのフォーラムを一つやりたいということですが、他には来年にはもう少しこんなことに力を入れたいということはあるですか。

栄田：そうですね。今、移行のグループだけではなくて札幌チャレンジドの中で広報について。どう札チャレを売り込むかでもないですけど、皆さんにどう知っていただくかっていうところで、いろいろと今お話をしています。その中で移行グループの方ではパンフレット。移行支援のパンフレットをどう作っていくかっていうところで。今利用される方向けのパンフレットっていうものはあるんですけど、できれば企業さん向けといえますか、就労移行支援ってそもそも何だろうっていうのがご存知じゃないところもやっぱりありますので、そこをお伝えできるようなパンフレットがあればなあということでこれからお話を進められたらとは思っています。

加納：そうね。やっぱり対象が違えば、カテゴリーが違えば、当然伝えるべき情報もまったく違う視点からの資料になってきますよね。

栄田：そうですね。

加納：障害のある方の相談支援事業所は去年、私も一緒に回らせてもらって、いろいろ札チャレでやっていることは伝えただけど、企業さんにはね、なかなか。企業っていってもね、本当に幅広いので、そういう方々にそういうものを作って。DMじゃないけど、まずは送ってみるみたいなことも必要かもしれないですね。

栄田：そうですね。

加納：なるほどね、分かりました。3点目、他にももうちょっと小ぶりなことですけど、こんなことできたらみたいなことはありますか？

赤坂：その広報の話にもつながるんですけど、やはり企業さんに障害について理解してもらってということですね。それが今、移行支援利用している方の出口というか就職先の確保にもなるので。本当にその出口をどれだけたくさん作れるかっていうところで、そこも本当は私たちが頑張らないといけないとこだなあとは感じてはいるんですが。

加納：年に2回ぐらい、「きたえーる」のところで障害のある方を採用したい企業と就職したい障害者の人のマッチングするような合同面接会があるじゃないですか。僕ははじめて見学に行ったときに2年くらい前かなあ。エントリーしている企業が多かったのね。もっと少ないのかなあと思っていたんだけど、いやいや結構7、80社、確かエントリーしてる企業があって、それなりにあるじゃんと思っていたんだけど、なかなか就職が進まないというのは何でなんでしょうね。

大山：応募する方も多いですよ。結局、企業さんに偏ったりとかもありますし。できる職種とかね、ご自身ができるなあと思う職種が、皆さんが一致してしまうと、やっぱり1社のところにたくさん、20人、30人と応募者がいたりとか。ちょっとスキルの高いお仕事だと、そこにはなかなか応募者がいなかったりですとか。そういうような偏りもできてしまったりですとか。

加納：なるほどね。企業は法定雇用率の問題もあるから、社会的責任として採用しなきゃいけないというマインドはあっても、じゃあどんな人を採用するかっていうときに、まだまだハードルが高いとか求めている像が上過ぎて。それは単純な能力っていうよりは、何かオールマイティーをどうしても求めてしまうからハードルが高くなるのかなあっていう気がするんですけどね。どうなんでしょうね。

大山：そうですね、ありますね。やはり一つの職種として、この仕事ができる人っていう形で募集が出ている場合が多いので。企業さんの中でいろいろ同じようにやっているお仕事、事務職なら事務職って絶対あると思うんですけども、そういう中でも切り出していうんですかね。企業さんの中でどうしても滞ってしまっている仕事などを組み合わせていただいたりとか、そういうふうに作っていただけるとすごくありがたいですね。

加納：その仕事の切り出しの仕方を、一步踏み込んで企業さんにアドバイスしてあげないと。切り出せばいいんですよっていても、それは理屈はそうでしょうけど、じゃあどうやって

切り出すのさ、みたいな。企業の人だとやっぱり言いたくなると思うので、われわれ自身ももう一步踏み込んで、企業さんの現場に入っていって、その実際にマッチングする障害者の人の能力を見極めながらやるっていう支援が必要になってくるから。そのためにはまだまだ来年も頑張って勉強しなきゃいけないですね。

栄田：そうですね、はい。

加納：ぜひですね、企業の方でも本当に障害者の人を雇用したいんだけど、なかなかいい人見つからないんだよねっていう人は札幌チャレンジドまでご連絡をいただいて。一緒になってね、企業の方と考えさせてもらって。そうするとさっきの冒頭に出てきた東急さんのようにですね、1人、2人、3人と増えていくのかなあなんて思うんだよね。このラジオを聴いておられる企業の方で障害者の就職を対応しようという方がおられましたら、札幌チャレンジドまでお問い合わせをいただければと思います。今日は就労移行支援グループの3人とお届けをしました。どうもありがとうございました。さようなら。

大山・栄田・赤坂：さようなら。